

ふえらむの窓

「海軍製鋼技術物語」を読んで

住友金属工業(株)常務執行役員兼総合技術研究所長 戸崎泰之

昭和20年8月、終戦。直後に公文書の焼却命令が出た。呉海軍工廠製鋼部の関係書類は、9月に連合軍総司令部から保存命令が出た時には全部焼却を終わっていた。著者は昭和16年に呉海軍工廠に着任し、製鋼部部員として終戦を迎えた。製鋼部経験者の記憶をもとに資料を作成し進駐軍に技術説明をした。その時の資料が手元に残り今日に至った。

日本の大型特殊鋼製造のルーツは海軍製鋼技術にあり、その貴重な資料を後世に伝えねばならないという著者の使命感、執念と気迫の集大成が本書*である。

幕末から明治、大正、そして昭和の終戦までの、主に軍艦用鋼材に関して、製造に関与した組織、人々とエピソード、使用された鋼種、その性質、製造法、試験検査法の詳細などが、図表、写真、現場記録をふんだんに使用し解説され、飽きさせない。

『鹿児島島の粘土、加賀産の黒鉛、山陰のたたら炉の玉鋼』明治時代の坩堝製鋼による兵器製造時の原料である。

『午前11:00ガス送り開始、翌日朝4:00熔落、10:45出鋼、温度は1655℃』昭和17年2月5日、呉第一製鋼50t酸性平炉の操業記録である。

私は「戦争を知らない世代」そして「平炉を知らない製鋼屋」である(余談だが私のパソコンでは“平炉”は単語として認知されていない)。高能率の転炉担当の頃、平炉経験を持つ先輩達から、一日一杯出せばよかった古き良き時代の平炉操業の話を聞き、羨ましく思ったものだが、本書に会い初めてその詳細を知ることが出来た。

圧巻は「大和」や「武蔵」ほか日本が世界に誇った軍艦の、徹甲弾、砲身、魚雷、装甲板、船体用高張力鋼板の製造法、機械的性質等をまとめた後半部分である。厚さ400mmを超える装甲板、それを撃ち破る徹甲爆弾や魚雷、撃ち出す砲身。それらはどんな仕様で、どう造られたのか。

「製鋼技術」としているが狭義の「製鋼技術」でなく鋳鍛圧や熱処理のプロセス、製品の性質用途、試験検査まで含まれており、全ての分野の方々に一読をお勧めしたい。戦前派の諸先輩にはおそらく限らないノスタルジアをもたらす友として、戦後派には温故知新のために。

最後に、病と闘いながら本書を纏め上げられた、著者の大変なご尽力に深甚なる敬意を表したい。

(2000年11月10日受付)

*海軍製鋼技術物語—大型高級特殊鋼の製造技術の発展— 堀川一男著

2000年9月(株)アグネ技術センター発行(TEL. 03-3409-5329)

新橋烏森今昔

住金コスモプランズ(株) 佐藤 駿

鉄道唱歌「汽笛一声新橋を～」で名高い新橋駅は、明治5年(1872)東京～横浜間に日本最初の鉄道がひかれた時、「新橋停車場」といったが、現在の土地の呼称では汐留貨物駅に当たる(今では、汐留貨物駅も既にその役目を終え新都市開発を待っているが、敷地の一部は現在東京臨海新交通線「ゆりかもめ」の発着に利用されている)。

大正3年(1914)に今の東京駅ができて東海道線の始発駅となると、新橋停車場は迂回されて貨物駅となり、新たにその西側に新橋烏森(からすみ)駅が作られた。これが現在の新橋駅である。

新橋烏森駅ができた翌年の大正4年(1915)、野呂景義は、「鉄及び鋼に関する学術、経済その他一切の問題を研究調査し、本邦に該事業の改良発達を期する」ことを目的として、鉄鋼の専門学会である「日本鉄鋼協会」を設立し、選ばれてその初代会長となった。翌々年の大正6年、待望の鉄鋼協会自前の会館が東京府芝区烏森町4番地に建設されたが、これは現在の地名では、東京都港区新橋2丁目に当たり、そのすぐ裏には東京でも古くからの「烏森稲荷神社」が鎮座する由緒ある地でもある。残念ながら、この会館は、大正12年(1923)9月1日の関東大震災の発生により潰滅したという。野呂は、当時、病の床にあったが、この悲報を聞いて落胆したものか、同月8日に永眠している。

新橋烏森界隈は、その後、戦後の荒廃をも乗り越えて復旧し、現在では多数のサラリーマンのアフターファイブの憩いの場となっていることは、周知の通りである。

(2000年12月12日受付)